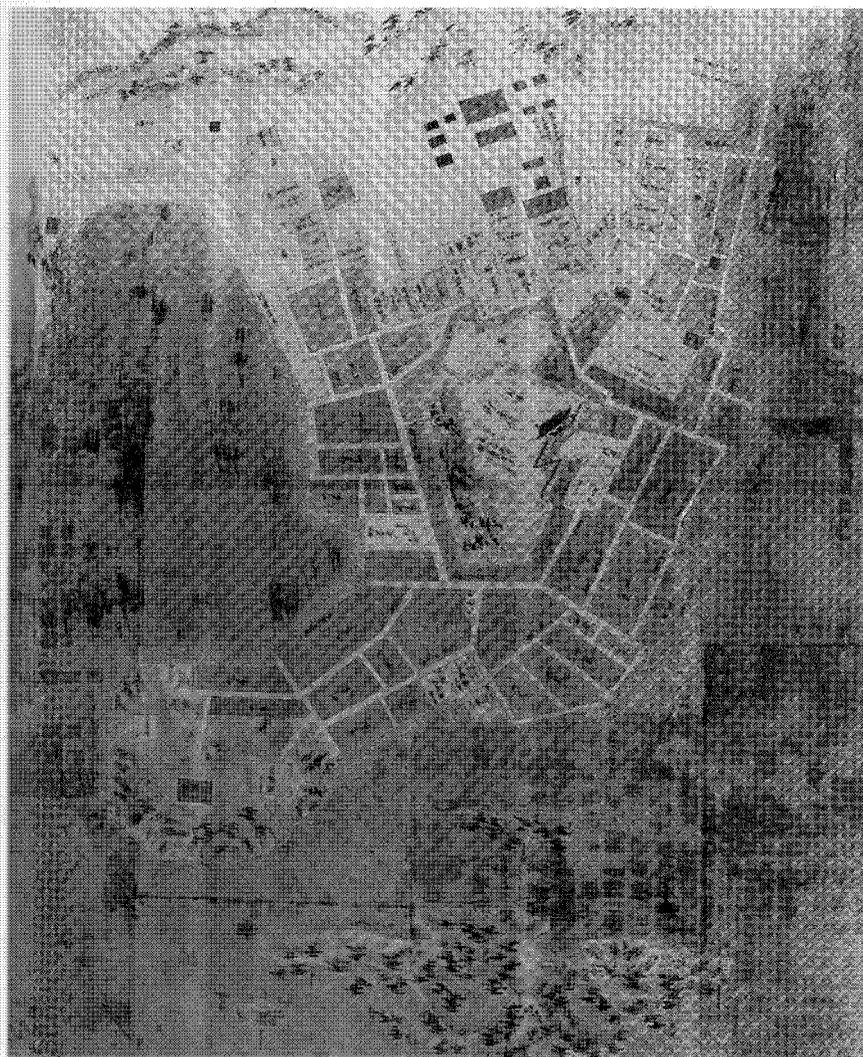


## 中山富廣氏 「近世の港と町並み」

中山です。よろしく願います。

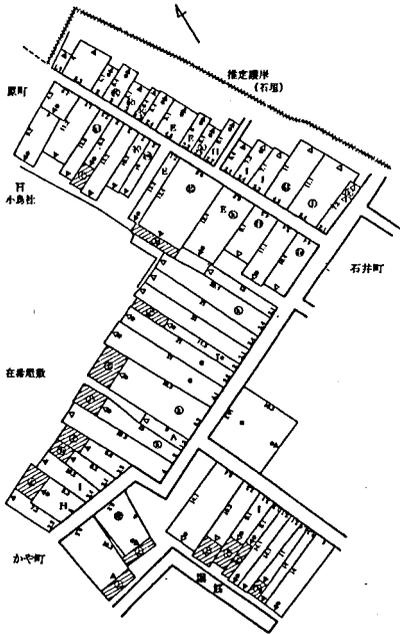
私が事務局の方から求められた報告の自身は、もともとは近世鞆の港と町並みの全体を、絵図・検地帳や文献史料によって復元する、という課題であったわけでありませう。しかし、私にはそういう資格があるのか能力があるのかということをお考えまして、報告を元禄時代の町並みについてということに限定したいと思っております。

町並みにつきましては、私が最初にやったわけではありませんし、むしろ地元の方のほうが詳しいんであります。これまでも、福山市教育委員会のものが数冊、おそらくここに来ておられる地元の方々が協力されて作成された調査報告書があります。それから、広島大学工学部の先生でいらっしやうた鈴木充先生が、日本の町並みというシリーズの中で、一九八二年の著作なんです、やっぱり鞆について取りあげて

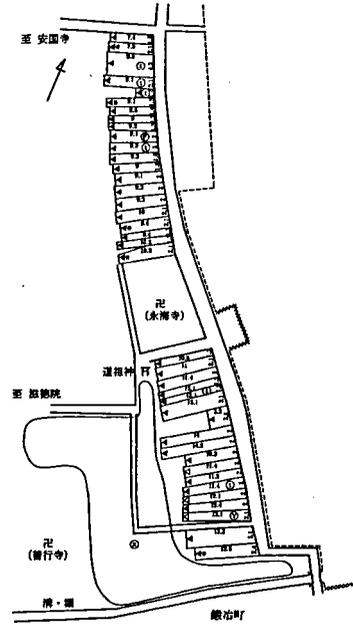


納町絵図 (伝元禄絵図、沼名前神社所蔵)

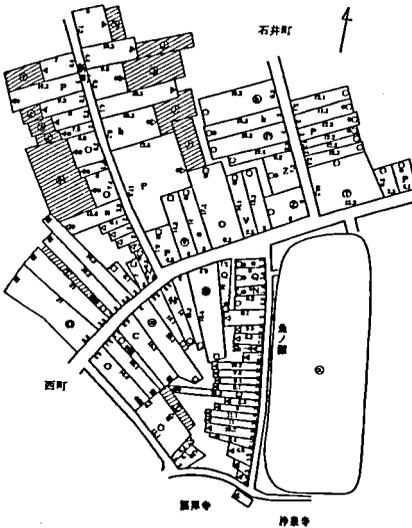




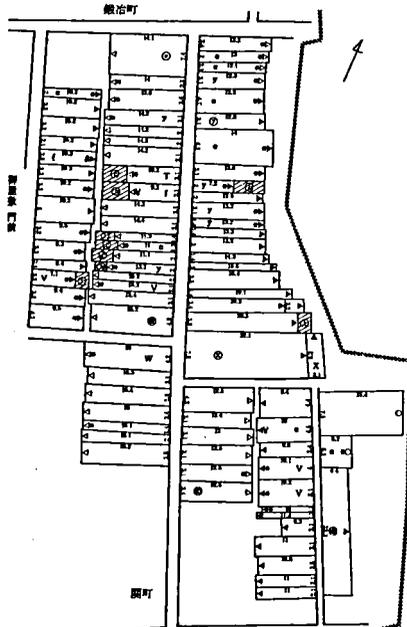
鍛冶町の推定復元図 (元禄13年)



原町の推定復元図 (元禄13年)



関町の推定復元図 (元禄13年)



石井町の推定復元図 (元禄13年)

おります。それから、一九八五年ですけれども、東京大学の稲垣栄三先生の調査チームが、やはり『近世の遺構を通して見る中世の居住に関する研究』という報告書を出されております。もうほとんど語り尽くされているわけでありまして。

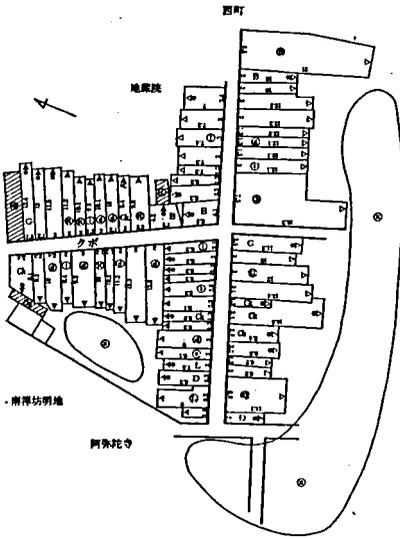
私も、三浦先生が代表で、福山市からいただいた調査費をもとにしまして、これらの諸先生方の仕事を参考としながら、調査をさせていただいたわけでありまして。その中で今日は、簡単に元禄時代の町並みについて、かいつまんで話してみたいと思うわけでありまして。

この町並みの復元とは、要するに街路と通りと屋敷ですね、特に私の場合には屋敷地を復元したいと言うことで、現在の地図や元禄時代の絵図といわれているもの(沼名前神社所蔵)を参考としながら、屋敷割を復元してみたいわけでありまして。資料の図を見ていただきながら、私の話を聞いていただきたいと思っております。

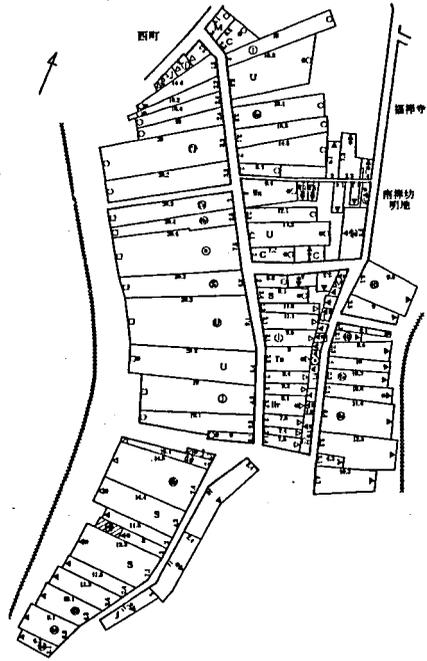
今回の報告の趣旨は、今言いましたように十八世紀初頭の町並みを再現するということでありますが、柄は現在では広い地域になっておりますが、江戸時代の七つの町の町人地に限定せざるをえなかったわけでありまして。ですから、寺町・祇園町の方は、全然調査をされておりませんので、また後ほどこの辺のところの手法なり方法論なりをご教示いただきたいと思っております、とりあえず原町の方から、少し気づいたことを述べていきたいと思います。

原町であります。私自身は明治初期の地籍図を見ておりませんので、図が果たして正しいのかどうか、また半分しか復元できていないんですけれども、一応、海に面した所に片側町と言いますか、屋敷地が並んでいるということが窺えるかと思っております。海岸線は、元禄絵図を見ましても石垣の形をしておりませんので、おそらく砂浜が磯づたいに道があって、そこに海側に面した屋敷地が並んでいる。途中に永海寺があって、その前に船着場がある。石垣で囲われた四角い、ここが(原町で)唯一の船着場である。藩主がここから福山へ帰ったという記録もあります。あとは、遠浅の磯浜ではなかったかという感じがいたしております。⊗は、原町のうち復元できなかつた所でもあります。私は、元禄絵図は計画図ではないかと思っていて、あの絵図に惑わされてはいけないと思うんです。元禄の絵図を見ますと、図で海岸の点線で囲んだ部分も「家」となっているんですね。ここはおそらく、町屋ではなかったらうと思えます。おそらく漁師の小屋か家がこの辺に並んでいたんじゃないかならうか、というふうな想像をしております。

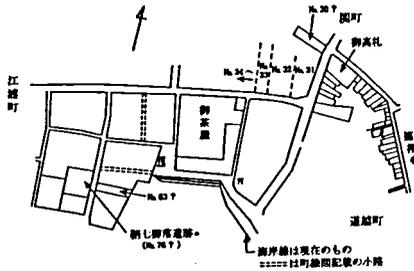
次に、原町から南下したところが、鍛冶町であります。この鍛冶町は、基本的には原町から下りてきた縦の通りと、石井町に面している横の通りの二本の筋で成り立っていることが窺えるかと思えます。鍛冶町の現在の地図を見ますと、昔の縦の通りの西側に一本の道が通っております、これは明



江浦町の推定復元図 (元禄13年)



道越町の推定復元図 (元禄13年)



西町の部分推定復元図 (元禄13年) と現在 (\*)

治以後の道路だそうで、この新しい道路を除けば、鍛冶町も昔のままの様相を維持している、ということが言えます。それから、海岸線沿いにも道があった可能性は否めないだろうと思います。鍛冶町は、新しい道のところは屋敷地が割れておりますが、原形はじゅうぶん見られるということだろうと思います。

それから南へ下がりまして、石井町であります。この町筋は、鍛冶町から南下する縦の通り、その外側の海岸線におそらく一本道路があったんだろうと思います。それから少し下がって、今の外屋さんの屋敷の外側にも道路があったことが、元禄絵図をもとにすれば言えると思います。石井町も町筋は当時のまま昔の面影を残していると思いますが、どうも元禄の前後に少しづつ海岸部を埋め立てた痕跡が、検地帳や寛文期の帳面などで窺えると思います。

次に関町であります。関町になってやっと屋敷の格が、等級で言いますと上々の屋敷、上の屋敷、中の屋敷が非常に多くなるということで、やはり経済の一つの中心地が関町であったということが、元禄十三年の検地帳で窺えるわけです。主要な町筋としましては、現在も残っておりますが、鞍部を越えて西町に通ずるメインの通り、それからその間の「魚の棚」の通り、それから新町へ通ずる通り、この三つの通りがあつて、今も面影を残している通りであります。残念ながら関町は全筆復元できませんで、「魚の棚」の海側⑧と

いう地域、面積にして二町余りの部分が未復元で、これは今後の課題であります。ただ、いろいろ計算をしてみますと、図に私が斜線を引いた部分には元禄絵図には立派に町屋敷が建ち並んでいるというふうになっているんですが、元禄十三年の検地帳でみる限り、この斜線部分が存在しないわけなんです。これはおそらく、土地が無かったというよりは、まだ開発したのでそこに家屋敷が建っていないというか、ここはまあ今回の検地帳では除外してやろうということで、この斜線部分はまだ埋め立てたばかりの荒地地で、その横側に「魚の棚」の屋敷が東側に少しあつたと考えていいと思います。

ですから、ここは中世期にはもつとへこんでいた所じゃないかということが窺えます。とは言いましても、享保二年（一七一七）の地詰帳によりますと、ここはもう屋敷地に登録されております。ですから、元禄から享保の間に、宅地化が急速に進んだということなんです。ということは、元禄から享保にわたって開発が進んでいた、十八世紀初頭にはほぼ現在の鞆の町の原形が急速にできあがっていったんじゃないかと推測しているわけです。つまり、この時期は全国的に見ても非常に商品流通が充実しまして、いわば高度経済成長にも匹敵する日本的な近代化が成し遂げられた時期だと思えますので、大体鞆もその波に乗って、この時期に開発が充実していったんじゃないかと思われまます。

それから福禅寺の所を通りまして、道越町に入ってくるわ



けであります。現在道越町の中心部は道路が通って、この部分が唯一開発によって失われているところであり、現時分は二つないし三つのメインの町筋があつて、一つが海岸部、もう一つがメインの非常に大きな屋敷が密集する通りであります。その東側に、ご存じかと思いますが有磯町の通りがあつて、幕府公認の全国でも有数の遊郭が存在した所であり、この有磯町の屋敷地の空間を見ますと、東側（海側）に大きな屋敷地が見られます。これは、遊女屋とか揚屋が並んでいたものだらうと思ひます。その通りの反対側には、きわめて小さな小地片、四坪・五坪ぐらいの屋敷地がずらっと並んでいることがわかると思ひます。これは、いろいろな料理屋や茶店、職人さんとかが住んでいただらうと思ひます。私もこの辺りを見たときには、面影があるなということをおもひ

ました。道越町の道筋は、特に大可島の北側の方はよく残されていて、山肌に接する細長い屋敷も現在でも残っておりまして、ああ残っているのかという感慨を二年前に覚えたことを、思い出しております。それから、問題は、中心地だったらうと思はれる西

町でありまして、これがなかなか復元できませんで、やはり地元の方のお知恵を拝借しないと何ともできないなと思ひているわけであり、検地帳もありますし、明治初期の地籍図があればかなり復元できるのではないかと思ひております。ですから、一部しか復元できず、一つは福禅寺の前の通りが坂を降りていく所に小さな屋敷が並んでおります。で、高札場がありまして、そこから海の方へ出るわずか数筆しか復元できなかったわけであり、四十間・五十間という奥行の屋敷地がありまして、それがどこにあつたかということがわかりませんでした。これは今後の課題であります。それから、御茶屋がありますが、元禄の絵図を見ますと街区が全て御茶屋となつていて、南（海岸）の方が余つてしまふんですね。いろいろ考へたんですが、もしかしたら海岸自体が元禄時代はもつと（二・三メートルぐらいでしようが）陸の方に下がつていたんじゃないか、ということをおもひ、えな、いとなかなか整合的にならないものですから、これもまた課題になるだらうと思ひます。

西へ行きまして最後の七番目の江之浦町ですが、これも西町からのメインの通りの屋敷地は何とかわかるわけであり、肩書きの無い人、屋号とか職業がない人が未復元地域にかなり多いんですね。だからおそらく江之浦町は、港湾労働者や

鍛冶や大工といった職人、あるいは漁師といった人々が住んでいた所であろうと思います。いずれにしてもこの江之浦町は、後に海側の方が埋め立てられていくわけであり、元禄十三年の海岸線は図の点線のように推定されております。

「おわりに」なんですが、資料にケンベルの『日本誌』を挙げております。これも有名な資料なんですが、大体同じ時期の資料であります。ケンベルというドイツ人医師がオランダ使節に付き添いまして江戸へ行って、その帰りにまた鞆に寄っているわけであり、ちょっと読んでみたいと思います。

「その西側」仙酔島の西かなんかであろうと思います。「石を投げれば届くほどの所に到着した。」今の石井町から関町付近の沖合に到着したんだろうと思います。「荒涼たる丘に寺が点在している鞆は、海から見ると絵のように美しい浦だが、遊郭やら漁家やら、その粗末な家などが多く、実際にはみすばらしい陋村である。この鞆は東の方、突き出した長い岩底の上にあるので、われわれはそこを回り、「おそらく大可島を回ったんですね。道越町の所に入ってきました、「南の入口に碇泊した。そこには日本で見た民家としてはまず上等な部類の、美しい住居や倉庫が長い列をなして建ちならんでいた。」という記述があるわけであり、ですから、ケンベルがおそらく関町・石井町・原町の沖から見たら非常にみすばらしい人家が建ち並んでいるという観察をしているわ

けですね。で、道越町の方へ回ってくると非常に立派な建物があつたと書いていることを考えますと、どうも原町から道越町の東側の海岸部は、元禄絵図に書いているようにしっかりとした石垣に立派な家が建ち並んでいるというイメージを与えられがちなんですが、そうではなくてまだその辺は（ケンベルは陋村に息苦しい・見苦しいといった感想を述べているわけですが）、どうも造ったばかりの石垣に小屋掛けした漁師さんとかがいて、それから有機町の海側というのは汚い建物が建ち並んでいて、町屋がぎっしり建ち並んだ立派な都市というイメージはこの海岸付近にはなかったんじゃないかと、もつとバラバラとして漁師さんや遊郭があつた程度が、ケンベルの時代じゃないかと思ひます。もちろんそれから十年・二十年後にはすっかりとした石垣になっていくんだろうと思ひますが、逆に今の港の方、西町・道越町の港は、美しい住まいや倉庫が林立していると考えていいように思われま

す。いずれにしても、元禄から十年・二十年たちまして鞆の町が急速に整備されていくことは間違いないわけであり、すし、西町から江之浦町にかけての埋立もこの時期から始まるわけですが、私は道路を重視するということを、さっき言いました、大体十八世紀初頭の道路・町筋がほぼ現在に継承されているということは間違いないわけであり、す。

ただし、屋敷地について見ますと、そのままの屋敷が残っ

ているということではない。やっぱり微妙に変化している屋敷、合併している所、分割している所ということで、かなり江戸時代の内にも屋敷地の形状は大きく変化していると思います。だからと言って、価値が減じるわけではない。屋敷地の合併・分割はどの時代でも行われますけども、こういったものが復元できるというのは全国でも貴重な存在だろうと言っていると思います。

それから検地帳を見ながら気づいたこと興味深いことがあります。それは、必ず七つの町（原町と鍛冶は一緒にまとめておりまして基本的には六つなんですけれど）に町会所というものがあるわけです。例えば、石井町の町会所というのは、ゼンリンの住宅地図によりまして、現在の大浜さん宅に当たります。石井町の人が集会する施設があった。道越町で言いますと、現在の野浜さん宅の一角が町会所であった。それから、七つの町全体の会所（惣会所）がありまして、それは石井町の福山藩御屋敷の門前、現在の藤井病院の一角に当たる所であります。私は、この電卓を片手に計算をしていく復元作業を通じて、一筆一筆比定して、この家が胡屋さんか、この家が舩屋さんか、この家が大坂屋、というようなことを一つ一つ押さえながら、考えながら復元作業をしております。ついつい情がうつっていくわけです。復元作業をやるということは、当時の人々の生活の息吹を感じる、そこがおもしろいわけです。これは、別の史料を提示しなければ

ならないんですが、当時の江戸時代の人々というのは、町会所で町人身分による話し合い・寄り合いが頻繁に行われたんです。これはもう、町の自治というものがあつた、認められていたわけで、会所に主だった人が集まり、また戸主全員が集まったりしながら、意見の集約をしたり、意見を述べ合ったりして物事を決めていったわけです。そういった各町の意見というのが惣会所に持ち寄られまして、そこで宿老を中心としてまた話し合いをする、そういうシステムがあつたわけです。その上で藩との折衝、藩から言ってきたことを上意下達する、あるいは町人の意見を藩に申し上げる、そういったことを準備する場が惣会所・町会所だったわけです。

おそらく日本史上、江戸時代が一番町内会が盛んだったろうと思います。衆議、話し合うということがよく行われたのが江戸時代であります。江戸時代の町人は、港湾の整備だとか、町の自治だとか、祭りだとか、といった様々な問題を町会所・惣会所といった施設を通じて意見集約をしながら解決してきたということを、忘れてはならないだろうと考えております。元禄期の町並みを復元しながら、あるいは「中村家日記」（今日を出しませんでしたけれど）を読みながら、感じたことあります。

また後に何かありましたら述べたいと思いますが、一応発表はこれで終わりにしたいと思います。